

## 第63回北海道畜産学会

### 蛋白質源としての植物性飼料給与が肉用地鶏の生産性および肉質に及ぼす影響

○ 國重享子（道立畜試）

【目的】近年植物性飼料を給与した生産物が好まれる傾向となっており、鶏でも魚粕の代わりに大豆粕等を給与する飼育が広まっているが、大豆粕を多給した場合、糞中の水分含量が増加することが問題とされている。そこで蛋白質の供給源として魚粕、大豆粕、菜種粕とコーンゲルテンミールを併給した3通りの飼料を給与し、増体や飼料要求率、肉質、糞中水分量等へ及ぼす影響を検討した。

【方法】蛋白質の供給源として魚粕を用いた区を魚粕区、大豆粕を用いた区を大豆粕区、菜種粕とコーンゲルテンミールを2:1の割合で併給した区を菜種+CM区とした。蛋白質飼料以外にはトウモロコシ、大麦、ふすまを用い、5~9週齢はCP19% ME 2,850kcal、10~15週齢はCP18% ME3,250kcal、16~17週齢はCP14.5%、ME 2,800kcalとなるよう給与飼料を調整した。供試鶏には肉用地鶏の雄を各25羽を用い、試験期間は5~17週齢とした。試験終了時にと殺し、部位別重量及び腹腔内脂肪割合、モモ肉及びムネ肉の剪断力価、ササミ中のイノシン酸及びグルタミン酸含量を測定した。

【結果】育成率は魚粕区の100%に対し、大豆粕区が93.5%、菜種+CM区が95.8%とやや低い傾向にあった。日増体重は魚粕区の26.6gに対し、大豆区が24.2g、菜種+CM区が23.7gと有意に低かった(P<0.01)。飼料要求率は魚粕区の3.59に対し、大豆粕区は3.64と高く、菜種+CM区では3.43と低かった。と体に対するモモ肉、ムネ肉、ササミおよび腹腔内脂肪割合に差は認められなかった。ササミ中のイノシン酸、グルタミン酸含量およびモモ肉、ムネ肉の剪断力価に有意差は認められなかったが、菜種+CM区の肉色b値がモモ肉が12.7、胸肉が19.6と有意に高く(P<0.01)、著しい着色が認められた。糞中水分量は、魚粕区が64.6%、大豆粕区が65.7%に対し菜種+CM区が55.3%と有意に低かった(P<0.01)。